『谷の陰』における「陰」に被せられた意味

徳　永　　哲

1．問題提起

『谷の陰（*The Shadow of the Glen*）』[1]は1903年10月に Fay 兄弟らの尽力によって，「アイルランド国民演劇協会」の初日を飾る出し物の一つとして，モウレスワース・ホールにて初演された。[2] その初演での観客の評判は上々であったらしく，不満の声はあるにはあったが，上演関係者にはほとんど気にならない程度のものであったようだ。しかし，この劇の上演をめぐって，舞台と無関係にジャーナリズム関係に力をもつナショナリストたちが攻撃的な批判を展開したのである。Joseph Holloway は反 Synge 派ではなかったが，1903年のまだ初演の日に至っていない９月に「まったくアイルランド的ではない」[3]と不快感を露にして批判した。さらに，アイリッシュ・インディペンダント誌は，10月８日の初演の数時間前に，Synge は「西方の島」から着想を引き出したのではない，「不健全な作品」[4]と批判した。純粋な民族的劇芸術を望む者なら，アイルランド国民演劇協会のこのような堕落に対して声をあげて反対すべきだ，と主張した。アイリッシュ・タイムスはアイルランド女性に対する侮辱であると決め付けた。[5]

Arthur Griffith の批判は上演から一週間後のことであった。シン・フェーン運動の機関紙であるユナイテッド・アイリッシュマンのなかで『谷の陰』に関して，批評を掲載した。[6] Griffith は，Synge の劇は『デカメロン（Decameron）』のいいかげんな書き直しにすぎず，全くアイルランド的ではないと批判した。具体的には，『谷の陰』のウィックロウの浮浪者（the tramp）はアイルランドの田舎女を「おかみさん（Lady of the house）」

と呼んでおり，また農夫の妻が一夜のもてなしを乞う男を「旅の人(stranger)」と呼んでいる，こうした呼び方をする者はウィックロウには絶対に存在しないし，他の32州のどこにも存在しない，というものであった。また，ノラ(Nora)を不貞の女と決めつけ，アイルランドの女性は世界でもっとも貞淑であるから，ノラはアイルランド人ではないとも批判した。Griffithの攻撃的な批判を，1916年復活祭武装蜂起で命を捨てたナショナリストのJames ConnollyやW.B.Yeatsの永遠の心の恋人Maud Gonneなどが同調した。Connollyは頽廃的精神がアイルランドに蔓延して，高まりつつあるナショナリズムの士気の低下を招くのではないかという危惧の念から批判した。[7)]

Syngeは，こうした批判に対して，静観したというよりは，作家自身の信念と作品の意図とは全く掛け離れたところで騒ぎ立てている論争に口を挟もうとはしなかった。どうでもよいことには口を出さないと言うのが彼の本心であったようだ。Griffithは『谷の陰』にしつこくこだわり，1905年に入ると『聖者の泉（The Well of the Saints)』が上演の準備が進められるが，その頃にも，『谷の陰』のプロットの出所で物議を醸し出して来たのである。[8)] Syngeははっきりとアラン島のパット（Pat Dirane）老人から聞いたものであると説明して口を閉ざした。Syngeは後に，「アイルランドの舞台では性を無視して他の要素ばかりであるが，わたしは性を蘇らせたのだ。人々は驚きの余り，性だけを見てしまった」[9)]とぽつりと言ったに過ぎなかった。

『谷の陰』への非難は，その何割かはアイルランド国民演劇協会批判の当てつけが含まれていたようであるが，異常なほどに激しいものであった。主人公ノラが旅の浮浪者の誘いにのって家出してしまうという劇の結末は，カトリックが8割から9割を占めるアイルランドでは物議を醸し出しても不思議ではないとしても，ジャーナリストやナショナリストが批判の先頭を切ったことは当時のアイルランドがいかに正常な感覚を失っていたかを明白に示している。W.B.Yeatsはその論争に積極的に挑み，真っ向からこの劇の正当性を主張した。1920年に回想して，「彼の代表作品を沈黙さ

せようとしたあの狂乱はたいていの暴力的な事柄と同様に，人為的なものであり，美徳とはほとんど無縁な人々による美徳の弁護であった」[10]と書いている。

Kopper Jr.[11]は「冷たく野卑な夫や臆病で卑しい心をもった自称の恋人やたわごとやおべっかで一杯に満たされている浮浪者，そしてそれに全くあきたりない女を描写している」『谷の陰』は「観衆を不安にしたに違いない」としながら，さらに続けて「この作品は，愛のない，Syngeの時代のお金もうけ主義のアイルランドの結婚に関する批判にとどまることなく，いつの時代にも通用する文学である」と書いている。Kopper Jr.の指摘する「いつの時代にも通用する文学」は『谷の陰』にふさわしい評価である，と考える。

Syngeはアイルランド的なものを表現するためにこの作品を書いたのではなかったのであろう。Syngeがパリに留学していた期間は1898年から1902年までの5年間であった。その間，フランスのモダニズムの2つの大きな潮流，ナチュラリズムとシンボリズムに出合っているはずである。[12]それらの影響を考慮するならば、『谷の陰』でSyngeが意図したことは，アイルランド的なるものばかりにこだわるアイルランドのナショナリストやジャーナリストの理解の範囲を超えた多様性をもっていたはずである。語られる言語の音楽性，言語のイメージが生み出す絵画性，それらに加えて，パリのモダニズムで知ったであろう性の解放と自由へのエネルギー，女性と言えども人生を選択できる自由があるといった近代的な思想性など，『谷の陰』はこれら3つの特性を一体として有する芸術作品なのである。『谷の陰』の初演当時，W.B.Yeatsは『谷の陰』がプロパガンダではなく，芸術作品である，[12]と述べナショナリストたちに釘を打とうとして反発を招いてしまったが，彼こそはこの劇の最初の理解者であった。

『谷の陰』の言語的音楽性は，Syngeがアラン島やウィックロウなどを旅して知った独特なアイルランド訛りと特異な語法から，ドイツに音楽留学までしたことのある彼の音楽的感性が音楽性を引き出し，詩の領域にまで高めて出来上がったものである，と考える。そして言語的絵画性は，幼少

のころから森や湖で鳥類の観察に明け暮れ，綿密にスケッチをし，生態を詳細に記録していた経験から生み出されたものである，と考える。

この劇の思想性はその音楽性と絵画性を統一し，精神的な息吹を与え，劇を推し進めて行く力でもあるが，一筋縄で説き明かせない問題でもある。そこでまず第一に問題になるのは『谷の陰（The Shadow of the Glen)』という表題である。この表題「谷の陰」からイメージされるのは山の彼方へ沈んで行った夕日の残光を背景に黒く浮かび上がる山々と色濃く陰る谷間の風景であろう。それだけを考えると，アイルランドの美しい谷間の寂しい風景を詩情豊かに描いたにすぎないのであり，ジャーナリストやナショナリスト，特にシン・フェーン運動の活動家たちからあれほどまでに批判的とされることはなかったはずである。

しかし、Synge は「陰 (the shadow)」に，そうした文字どおりの意味に解しては汲み尽くせないほど豊かにシンボリックな意味を被せていたのである。その意味も理解の仕方によっては，ナショナリストたちの活動や存在そのものを根本から揺るがすほどのものが感じ取られるものがあったにちがいない。この小論ではその「陰」に〈被せられた意味〉を追究し，できる限り明らかにしたい。

2．ウィックロウ山岳地帯の「陰」

まず，この劇の背景となったウィックロウの山岳地帯の生活から「陰」の意味を考えてみることにしたい。ウィックロウの渓谷は遠方から見ているだけなら美しい景観を呈しているのだが，そこで生活するということになると話は別である。自然が美しいということとそこで生活するということとは全く別問題なのである。この劇のモデルになっている家は渓谷の奥まった，寂しい所にある。家の周辺には岩肌が露わになっており，道も含めていたる所に大小の石がごろごろしている。樹木はほとんど無い。緑は少なく，岩と岩との間にヒースが小さな茂みをつくっている程度である。家の裏はすぐに小高い山になっており，黒ずんだ岩肌を天に晒している。

Synge が『谷の陰』を書くまでの5年間，毎年旅して体験したアラン島

の自然は暴力的であり，悪意に満ち破壊的でさえあった。[13]その自然は『海へ乗り行く者（*Riders to the Sea*）』[14]に描き出された。しかし，それとほぼ同じ期間に時々訪れては体験したウィックロウの山岳地帯の自然は，アラン島とは違った冷酷無情があった。アラン島の自然は人間に対して厳しく，攻撃的でさえあるが，反面それに対処する人間に強い生命力をもたらした。それとは対照的に，ウィックロウの自然は静寂の中に人間を孤立させ，狂気へと追い込んでいくのである。

Syngeはウィックロウの山岳地帯の人々の生活を，彼のエッセイ *In Wicklow の The Oppression of the Hills*[15]で書いている。それによると，季節毎に降る大雨，雨漏りで家の中の土間が泥沼（the bogs）のように泥濘む。雲が切れると風が激しく吹きまくる。渓谷（the glen）の中を吹き荒れ，ものすごい音をたてる。朝になると止むが，また夜になると雨が降り，風が吹く。この繰り返しの中で，人々の心は圧迫され，押し潰される。神経性の抑鬱症（nervous depression）にかかる人が多く、中には精神病院（the madhouse）で半生を過ごすものさえある。Syngeは，そうしたウィックロウ州の山岳地帯の自然に圧迫される人々の重苦しい気分と悲しみをそのまま『谷の陰』の気分として再現している。

さらに，Syngeが山岳地帯で生活する人々の中で最も悲劇的に感じたのは若い女性の生活である。ある若い女性ナニィ（Nanny）は，母が死に際に，寂しい山を降りて幸せになるように遺言していたにもかかわらず，山を降りずに一人で生活していた。しかし，孤独と不安のために気がおかしくなってしまった。彼女は外で雷が鳴ると怖くなって，その度に自分が死んでも誰も気付いてくれないのではないかと思っては不安でたまらなくなる。そうした中にあっても，彼女は信仰深く，神の恩寵を信じて疑わないでいた。また，そのナニィよりももっと若い女性であるが，雷が鳴ると怖くなって，自分を訪ねてくれた姉妹が帰る途中に泥沼にはまって死んだのではないかと不安になって泣き叫ぶ。そして，実際に自分で沼地を歩いて回って無事に帰ったことを確かめるまで安心しない。こうした女性たちの避けがたい不安と孤独は中心人物ノラの孤独と不安に結びつけられてお

り，彼女によって語られるのである。

『谷の陰』の「陰（the shadow）」が表わすものはまず，現実に Synge が体験したウィックロウ山岳地帯の女性たちの悲劇である。彼女たちのうえに静かに，冷酷に忍び寄る「陰」は人間の正気を破壊し，人間の存在を破滅させてしまう自然の恐ろしい力なのである。

ノラにとって自然がもたらす不安や孤独は，生活の糧がそこに十分あり，生活が保障されていても，耐え難いものである。彼女は結婚したことさえ後悔している。ノラは次のように語る。

> 長い夜には決まって，あの時は大変馬鹿だったと思うんだよ，マイケル・ダーラ。だって少しばかりの土地があって牛を飼っていたって，裏の山に羊がいたって，それがなんだっていうんだい。始終ここにぼんやりすわって，そこの戸口から外を眺めていても，見えるものといえば，巻くように沼地へ降りていってはまた，昇っていく霧ばかりで他に何も見えやしない。聞こえてくるものといえば，嵐に吹き飛ばされずに残ったわずかばかりの折れた木々の中を音をたてて吹き抜けていく風の音や雨でゴーゴーと大きな音をたてて流れる水の音ばかりじゃないか。
>
> I do be thinking in the long nights it was a big fool I was that time, Michael Dara, for what good is a bit of a farm with cows on it, and sheep on the back hills, when you do be sitting, looking out from a door the like of that door, and seeingnothingbutthe mists rolling down the bog, and the mist again, and they rolling up the bog, and hearing nothing but the wind crying out in the bits of broken trees were left from the great storm, and the streams roaring with the rain?[16)]

ノラにとって結婚は安定した，裕福さを得るための手段であったが，住んだ場所は岩が剝き出しになった山の谷間で，近辺には家はなく，泥沼の

間をぬう細い道が一本あるだけの寂しい場所であった。そうした場所に暮らす孤独と不安のほうが，物質的に富まれて安定した生活を得ることなどは問題にならないほどに辛いことであり，耐え難いことであるということを，ノラは谷間の生活を通して始めてわかったのである。

3．人生の「陰」

ノラは四方壁に囲まれ安全が保障された中から〈自然〉を見つめて不安になり，孤独になっている。同時に彼女は〈自然〉ばかりでなく，〈人生〉を見ている。ノラは〈人生〉の諸現象を見るにおよんで，全く非凡な心境と視野を抱くに至っている。ノラが若い羊飼いマイケルを家へ連れて来て，二人でお金の計算をする場面からその心境を知ることができる。

マイケル　ほら5ポンドとお札が10枚だ，たいへんな額だ，ほんとうに。若い男と一緒になればそんな話はしなくなるだろうよ，ノラ・バーク。それにみんなの話じゃ，こんどの市ではおれの羊が一番上等だったということだ，すごくいい値段になったんだよ。今じゃ，羊が上等なときには取引は抜け目なくやるからね。

ノラ　それでいくらになったのだね。

マイケル　全部で20ポンドさ，ノラ・バーク。ところでおれたちは主人が教会の墓地に埋葬されるまで今は待った方がいいね。それからラスバンナのご聖堂で結婚式を挙げよう。そして裏のあんたが持っている山でおれは羊を飼育するんだ。そして，霧が降りてきても，おれたちには思い煩うことはなにもありゃしないのさ。

ノラ（マイケルにウィスキーをついでやる）どうしてあんたと結婚するのさ，マイク・ダーラ。あんたは年を取っていくわ。そしてしばらくすれば，顔をふるわせ，歯は抜け落ちてしまい，羊がよく藪の間を潜り抜けるところにひっかかった羊毛のように白髪がいたるところに目立つようになって，何もすることもなくぼんやりと寝たきりになっているんだよ，うちの主人みたいにね。

Michael.　That's five pounds and ten notes, a good sum, surely!...

It's not that way you'll be talking when you marry a young man, Nora Burke, and they were saying in the fair my lambs were the best lambs, and I got a grand price, for I'm no fool now at making a bargain when my lambs are good....

Nora. What was it you got?

Michael. Twenty pound for the lot, Nora Burke... We'd do right to wait now till himself will be quiet a while in the Seven Churches, and then you'll marry me in the chapel of Rathvanna, and I'll bring the sheep up on the bit of a hill you have on the back mountain, and we won't have anything we'd be afeard to let our minds on when the mist is down.

Nora [pouring him out some whiskey]. Why would I marry you, Mike Dara? You'll be getting old, and I'll be getting old, and in a while, I'm telling you, you'll be sitting up in your bed — the way himself was sitting — with a shake in your face,and your teeth falling,and the white hair sticking out round you like an old bush where sheep do be leaping a gap.[17)]

ダンがほんとうに死んだものと思い込んでしまっているノラと彼女の愛人マイケルが残された財産や葬式のこと，また二人が一緒になる頃合いを話合っても不思議ではない。愛人関係にある平凡な男女ならそうするであろう。マイケルは極めて平凡な男である。彼はノラに生活のためのありふれた話題を持ち出している。マイケルにとって，わずかばかりの土地でも自分のものにすれば，羊を追って山岳地帯を渡り歩いていく流れ者的生活に終始符が打て，定着した生活を得ることができる。ノラが少し老けた年増であっても，それは安定した生活を得ることに比較すれば，たいした問題ではない。それはまた，ノラが安定した生活を求めて老いたダンと結婚したことと符合する。彼はできるだけ速やかにダンを埋葬し，一緒になれる段取りをすすめたいばかりである。老夫ダンの悪習癖から解放されたノ

ラはもっと自由であるべきであるし，マイケルの話に乗るのが自然である。しかし，ノラが求める自由はダンという年老いた嫌いな夫からの解放ではない。彼女が求めたものは人生の苛酷な諸現象，すなわち老い，狂気，孤独，あるいは性欲の衰退や異常性欲など，そうしたものすべてからの解放である。ダンと結婚した当初，ノラにとって生活の基盤は〈お金〉であって，〈自由〉や〈愛〉といったものへの自覚は全くなかった。ノラの〈自由〉への自覚は，〈自然〉や〈人生〉と向き合うようになって，〈お金〉を無価値なもの，無意味なものと思い始めたその時間と同時進行していたのである。それはKopper Jr.が指摘しているように「彼女が入念にポケットのなかに隠そうとしているお金はマイケルとの結婚はダンとの結婚とはあまり大きな違いはないだろうとノラが悟るとき重要性は薄らぐ」[18]のである。

マイケルは性的欲求を満たせることや男性的甲斐性で生活を保障できることなど，女性が求める条件を満たせる自信ゆえに当然結婚はできるものと疑わない。彼は，独り身の不安や恐れから安全な場を求めるように彼女が自分の中へ入ってくるものと確信するが，その確信は見事に外れてしまった。ノラの境地はマイケルの平凡な生活の領域を超えてしまったのである。

Syngeはこの劇の筋の素材をアラン島のパット(Pat Dirane)老人の話[19]から得た。乳飲み子を家に残したまま「市」に出掛けて戻って来ない母親がいて，近所の若い女たちが母親の代わりになって乳飲み子の面倒を見ているというその小さな田舎家で，パット老人が語る浮気な妻の話を聞いた。その話とは，若い妻を疑った夫が死んだ振りをする。すると，妻はまんまとその策略にかかって愛人を連れて来て，奥の寝室に入る。姦通の現場へ夫は棒ぎれを持って入って行き，相手の男を激しく打つという，浮気な妻を戒めるための残酷な教訓話であった。

Syngeはこの教訓話を筋に用いた。しかし，勿論，Syngeはこの話をそっくりそのまま劇の筋に用いてはいない。パット老人は浮気な妻の悪行を戒める意図を持ってその話を語ったが，Syngeにはそれと同じ意図がまったくなかったと考える。そのために，パット老人が死人の側に立って，妻と

若い男が戒められるのは当然とするのであるのに対して，『谷の陰』では，妻のノラは夫ダン（Dan）と対立する。そして，浮浪者（the tramp）は妻を家から追い出そうとする夫ダンとノラの間に入っていき，ノラをかばって，ダンを咎める。

> だんなさん，年寄りにしてはひどいことを言いなさる。おかみさんは，外へ追い出されたら，どうやってやっていけるんだね
> It's a hard thing you're saying, for an old man, master of the house, and what would the like of her do if you put her out on the roads?[20)]

しかし，ダンは浮浪者に対して次のように言う。

> ペギー・カバナーみたいに，四つ辻でお金を無心したり，男たちに媚を売ったりしてほっつきまわったらいいんだ。
> Let her walk round the like of Peggy Cavanagh below, and be begging money atthe cross roads, or selling songs to the men.[21)]

ダンは，ノラを家から追い出し，ペギー・カバナー（Peggy Cavanagh）のように乞食をし，売春をして生活し，やがて見るも無残な姿に老いて寂しく死んで行け，という言うのである。この衝撃的な台詞は，Jean Alexander の言葉を借りれば，「暴力を精神的な暴力に変形させている。…血がほとばしり出るまで棒で打つという物理的行為は，死のイメージを伴ったことばの攻撃」[22)]となっているである。

台詞の中だけに登場するペギー・カバナーはノラにとって重大な意味をもっている。老齢に達し，毛髪は抜け落ち，視力もなくなり，一人で放浪の生活を送る。やがて衰弱し，孤独のうちに寂しく死んで行く。ペギーの生涯をノラは自己の生涯と照合している。やがて老化していく自己の姿をそこに見いだしては不安になり，恐怖心を募らせている。ノラはペギーを見て人生を恐れているのである。一方，無頓着なダンには人生が見えてい

ないために，老化への不安も恐れも抱かない。

Jean Alexander は「陰」について次のように書いている。[23)]

谷の「陰」とは自然の暗い側面である。もっとも明白には，陰は死である。日が沈もうとしている時に彼女の夫が陰によって取られるときノラは安全な場所としての家を疑い始める。…生の選択は死に方の選択である。男たちはダーシイ (Darcy) のように谷の陰にふさがれて無謀になるか気が狂う，もしくは四方壁に囲まれた中で，ダンのように突然陰に奪われるかも知れない。女たちにとって陰が訪れる前でさえ，家庭的役割には全く安全はない。ノラはペギー・カバナーのことを考える。

またある時ペギー・カバナーを見ているとふっと思ったんだ。ペギーは昔とても厄介な乳搾りやパンをかえすのを手際よくやったものだが，それが今じゃどうだね。街道をぶらぶら歩き回ったり，汚れた古い家の中でぼんやりしていたりして，歯は抜けて，正気をなくし，ハリエニシダを焼き払ったあとの山ほどの髪の毛も生えていやしない。

And saying to myself another time, to look on Peggy Cavanagh, who had the lightest hand at milking a cow that wouldn't be easy, or turning a cake, and there she is now walking round on the roads, or sitting in a dirty old house,with no teeth in her mouth, and no sense, and no more hair than you'd see on a bit of a hill and they after burning the furze from it.

官能的な美や力が消えるときに女性にとって死が訪れる。女性はそれを知っている。それは時間がゆっくりとむしばんで行く死である。自分の心と肉体の衰えを見つめることは心ぼそくするのかもしれない，しかし，結婚は二重の死ぬべき運命を提供する，なぜなら，ノラは別の死にかかった者と共に暮らさなければならないからである。共同体における死は毎朝向かい合う長い死である。

〈人生〉を自覚するノラは〈人生〉に長く伸びる「陰」を見る。「陰」は，

山間の谷にだけでなく，壁の隔てを越えて家の中に侵入して来ており，昼夜の境もなく覆い尽す。そして，「陰」は「死」と「生」の境界さえ見えなくする。自覚の無い男ダンには「陰」は「家」を取り巻く闇であり，「死」である。「家」は四方の壁によって「死」から守ってくれる砦でもある。

Katherin Worth は「Synge の世界もまた神を失ったり，神の希望さえも失った人間の孤独が，また物質的生活の愚かな，また残酷な諸事実が，しかも，例外的な出来事ではなく，病気，老齢，死というものの『普通の』出来事として描かれている点で新しい，現代的重要性がある」と，神を失ったヨーロッパ世紀末的問題を取り扱った劇として『谷の陰』を位置付けている。そのうえで，「陰」について，「『陰』とは Synge の総ての戯曲に感じられる陰であり，近付きくる老齢と死を思う不安である」[24]と論じている。

頑なで残酷なダンに対して浮浪者はノラに家出を誘う。

> さあ，行きましょう，おかみさん。わたしのおしゃべりばかり聞かなくともよいのです。暗い湖の上を啼きながら渡っていくアオサギの声を聞くでありましょうし，ライチョウやフクロウの啼き声を聞くでありましょう。また，暖かい日には，ヒバリやオオツグミの声も聞けるでありましょう。そうした鳥たちの声を聞いているとペギー・カバナーのように老けて髪の毛が抜けたり，視力が衰えたというような話をきくことはありません。日が昇ればすばらしい鳥たちのさえずりを聞くのです。あなたの顔の近くで，老人が病んだ羊のようにあえいでぜいぜい云うのを聞くこともありません。
>
> Come along with me now, lady of the house, and it's not my blather you'll be hearing only, but you'll be hearing only, but you'll be hearing the grouse, and the owls with them, and the larks and the big thrushes when the days are warm, and it's not from the like of them you'll be hearing a talk of getting old like Peggy Cavanagh, and losing the hair off you, and the light of your eyes, but it's fine songs you'll be hearing when the sun goes up,and there'll be no old

fellow wheezing the like of a sick sheep close to your ear.[25)]

夫を捨てて，浮浪者（Tramp）と共に家出をしてしまう。浮気な妻を戒める話が妻の家出という Ibsen の『人形の家（A Doll's House）』に似た結末をもった問題劇らしき劇に変身したのである。

浮浪者に誘われて家を出るノラではあるが，家出の真の理由は，誘われたことにあるのでは勿論ない。ノラにとって人生で最も重要な問題はペギー・カバナーの克服である。ペギーのような姿で老いて死んでいくことほど怖いものはない。しかし，そうなるときは必ずやってくる。これは人生の必定である。ノラは恐れ，不安の中でそのときを迎えるよりは，積極的にそれに立ち向かっていく決断をしたのである。「家」を出て，いままで壁の内側から見ていた世界へ飛び込んでいくことによって人生の不安や恐れからの脱出，あるいはそういったものの停止をすると決断したのである。

Kopper Jr.はその点を次のように分析している。[25)]

> その決心は彼女自身のためになされる。彼女は浮浪者と一緒に行く決心をするが，その決心は人生はそこに言われているほど幸せとは限らないだろうという現実的な判断に基づいてなされている。浮浪者と自然が提供するものは，年を取る過程からの気晴らしであり，老化の停止である。自然に包み込まれて，家の中で気に病んできたようにはノラは老化を急き立てられるということはないだろうし，ヒバリやツグミがペギー・カバナーの衰えを語ることはない。

4．終末的「陰」

劇の最後に，残されたダンはノラが連れ込んで来た若い羊飼いの男マイケル(Michael)と仲良くなって，ノラが出ていった後二人で乾杯して，ウィスキーを飲む。この結末はまた新たな解釈を可能にする。

Synge は少年時代，家の外と内とを次のようにみなすようになっていた。すなわち，母 Kathleen の熱心な信仰と厳格な教えとに拘束される〈家〉と自由な歓びと神秘な魅力にあふれた〈自然〉とを対照させるようになっ

ていた。彼にとって，伝統を誇る一族の〈家〉は閉鎖された偏狭な世界でもあった。そこでは，宗教的な信念や特権階級的な意識だけを堅く守りながら生きる人々が，新しい時代の大きな潮流の中で社会的孤立を深めつつあった。土地や財産を失い，退廃化が進む中でも特権的意識を捨て切らず取り残されて行く人々，母カスリーンはそうした人々の一人であった。〈家〉にはなじめず，いつも一人で〈自然〉のすべてのもの，鳥獣類や山々，湖，そしてその中に暮らす貧しい小作人たちを見つめ，それらを友として来たSyngeにとって，〈自然〉は神秘な力でもって，たえず想像力を刺激し，人間らしい感性を育んでくれるすばらしい場所であった。

『谷の陰』は，Syngeが少年時代から抱くようになっていた〈家〉と〈自然〉という二分化された世界として反映している考える。『谷の陰』の登場人物たちはそれぞれ二つの世界に二極分化されている。一つの極にはダンが，その反対の極には浮浪者が立っている。ノラとマイケルの存在はその間にあって揺れ動いている。その二極の中間に存在するが，やがていずれかの極に吸収される。

Thomas J. Morrissey[27]は『谷の陰』における笑劇的おかしさの背後にSynge独自の厳然たる「神」の問題が隠されていることを明らかにしている。Morrisseyはこの劇の世界を二分し，一方の世界にダン・バーク（Dan Bark）とマイケル（Michael）を位置付け，またもう一方にパッチ・ダーシイ（Patch Darcy）と浮浪者（Tramp）を位置付ける。さらに，ダンは「生きながらの死（death-in-life）」[28]の概念を具現したものであり，堕落した「アンチ・キリスト（anti-Christ）」であり，「見せ掛けだけのクリスチャン（the nominal Christians）」である。一方，パッチ・ダーシイは「死して生きる（life-in-death）」[29]の概念を具現していて，孤独で狂人的な死を遂げるが，彼の寛大で自己犠牲の精神は語り継がれ，生き続ける。ダンの「生きながらの死」を特徴付ける台詞はノラによって吐かれる次の台詞である。

> 冷たくなったからといって，あの人みたいな人には死んだ証しになんかにはなりませんよ。だって，あの人は結婚したときからずっと冷た

かったんですからね，旅の人。

Maybe cold would be no sign of death with the like of him, for he was always cold, every day since I knew him, ——and every night, stranger....[30]

ノラはダンと暮らすことが精神的には死に相当することを悟るようになっている。Morrisseyは，このダンが死を装い，生き返る奇怪な行動はキリストの受難と蘇りのパロディーであり，そのパロディーは実際にウィックロウに存在するキリスト教義の滑稽な堕落を基にしている，[31]と述べている。しかし，「陰（the shadow）」は，Morrisseyが論じているように，こうした身近な日常の問題を遥かに越えた哲学的な，歴史的な問題を表現している。谷に陰がのびて，黄昏時を迎えようとするころとは，まさにキリスト教義が堕落し，精神的な混乱と暗黒を迎えようとしている時代を比喩的に表現していると考える。

日常生きていながら死んでおり，実際に死んでもその違いがはっきりしないダンは宗教的環境の死そのものを具体的に表現していると言える。事実アイルランドのキリスト教はMorrisseyの強調するところであるが，寛大さを失っていた。ダンの小心で冷酷な性格こそアイルランドのキリスト教を象徴していた。狂気と放浪の果てに死んだパッチ・ダーシイは偉大と寛大の象徴的存在である。次のノラの台詞はそれを明らかにしている。

彼はほんとにすごい人でしたよ，気がおかしくなって死んだというのに，今の人が死んだ人のことを誉めるなんてすごいことじゃありませんか。

He was a great man surely, stranger, and isn't it a grand thing when you hear a living man saying a good word of a dead man, and he mad dying?[32]

パッチ・ダーシイは死して人々の精神の中に生きたと考えることができる。

Morrisseyはダンとパッチ・ダーシイの性格を明確に区別するものに「羊(sheep)」のモチーフをあげている。「事実，羊のモチーフによってパッチ・ダーシイはダンだけでなくマイケルとも哲学的に正反対であることが明らかにされる」[33]と述べて，聖書の箇所「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は，羊のために命を捨てる」(ヨハネによる福音書) から，「ダーシイが自分の羊のために払う犠牲は聖書の良い羊飼によってなされる犠牲とひじょうによく似ている」としている。またさらに「良い羊飼 (the Good Shepherd)」の証として，ダーシイが「500頭もの羊の中を歩いても，羊の数を数えていたわけではないのに，1頭も見落とすことがなかった。(...would walk through five hundred sheep and miss one of them, and he reckoning them at all.)」[34]というノラの台詞を挙げている。

Morrisseyはパッチ・ダーシイとイエス・キリストのそうした類似点ばかりでなく，違っている点からも次のような結論を引き出している。

> 浮浪者によるとパッチ・ダーシイの福音は心理的死から逃れる唯一の希望であるが，しかし，それは肉体的な死からの解放をもたらさない。ダーシイとイエスの教えとの主な違いはダーシイが永遠の生活を約束しないことにある。ダーシイは生きている間だけ自分の羊を守る。この意義はノラと浮浪者が報酬の希望によってではなく，ダーシイの献身の思い出によって鼓舞されるということである。ダーシイは永遠を与えることはできないが，彼の思い出は愛の犠牲の原理をおこない，こうして，より積極的な態度で死の陰に直面するのに必要な力を彼の同胞たちに与えるのである。[35]

浮浪者に関しては「死して生きる」パッチ・ダーシイの「代弁者」としている。反対にマイケルは牧夫であるが，聖書でいう「羊飼ではなく，羊が自分のものでもない雇い人」(ヨハネによる福音書) であり，羊のためにすすんで犠牲になることはせず，羊を売買してひたすら金儲けにだけ精をだす今日的な資本家の姿である。こうしたMorrisseyの理論から，Syngeはこのマイケルをダンと結託させることによって，当時のアイルランドの聖職者と資本家は同じ場所に立っていたと考えることができ，さらに，両者

が結託する，「良き羊飼（the Good Shepherd)」の死んだ社会は神不在の「陰（shadow)」が覆う世界であり，まさに生きながら死している，救いの無い世界を描き出したと考えることができるのである。

5．結論

「陰（the shadow)」に被せられた意味は，第一にウィックロウ山岳地帯の〈自然の脅威〉であり，近代文明とは無縁の世界に生きる人々を覆う〈恐怖〉であった。第二には，人生で避けることのできない〈老化〉と〈死〉であり，それらを迎える人々の〈不安〉と〈恐れ〉である。Syngeは自分の死に様を模索することによって，その不安や恐れを克服しようと考えていたのかも知れない。第三には，キリスト教が深く根付いた国でありながら，愛の犠牲の原理によって人民を率いていく指導者を失ってしまったアイルランドの資本家や聖職者の腐敗，堕落，民衆の無気力，ヨーロッパ全体を覆う歴史的終末観の浸透，こうしたものすべてを包含していた。

そして，それらを象徴的に表しているのは，ヨーロッパ大陸では横行し，Syngeがアイルランドでも，特に田舎では根強く残っていると思っていた「愛のない結婚」という問題である。遺産や財産目当ての結婚，そして不倫と悲劇的な末路，こうした自由な近代社会における女性の悲劇は19世紀モダニズム文学がこぞって取り上げたテーマでもあった。Syngeもそうしたモダニズムに浸透された作家であったように思える。しかし，彼はモダニズム一辺倒ではなかった。ノラが最後に浮浪者と一緒に入って行った〈自然〉，すなわち長い歴史のなかでアイルランド人を支えて来た，人為を拒絶し，神々の住む〈自然〉とそこに培われた純然たる〈想像力〉の世界を〈救い〉の場として選択したことは，まさにそのことを示していると考える。モダニズム文学が歴史的閉塞状況と近代社会の堕落を再現するに止まっているのに対して，Syngeは閉塞状況を打ち破り，新たな〈救い〉の場を提示したことでもって，モダニズムを一歩超えていたと言えるのではないだろうか。

註

1) J.M.Synge, *Collected Works* III *Plays Book* I. Colin Smythe,1982.

2) Greene and Stephens, *J.M.Synge 1871-1909.* Macmillan,1959. p.146
アイルランド国民演劇協会（The Irish National Theatre Society）は Yeats の劇 *The King's Threshold* と *Cathleen Ni Houlihan,* Synge の *The Shadow of the Glen* を上演した。
（初演の配役）
Dan Burke, George Robert. Nora, Maire Nic Shiublaigh.
the Tramp, Willie Fay. Michael Dara, P.J.Kelly.

3) Edward A. Kopper Jr., "The Shadow of the Glen" (*A J.M.Synge, Literary Companion,* Greenwood. pp.25-35) pp.25-6

4) 前掲. Greene and Stephens. p.145 "unwholesome productions"

5) 同上. pp.146-7

6) 同上. pp.147-152

7) 同上. p.151

8) Robin Skelton, *J.M.Synge and his world.* Thames and Hudson. p.85
On the French stage you get sex without its balancing elements:on the Irish stage you get the other elements without sex. I restore sex and the people were so surprised they saw the sex only....

9) W.B.Yeats, *Essays and Introductions,* "J.M.Synge and the Ireland of his time". Macmillan. p.312

10) 前掲. Edward A. Kopper Jr. p.35

11) Christopher Murray, *Twentieth-Century Irish Drama.* Manchester U.P.. p.67-8. Synge's uncle, the Revd Alexander Synge, had been a Protestant missionary on Aranmore in the 1850s, and Synge may well have felt drawn to Aran as much on account of his curious family history as for linguistic and cultural reasons. All Yeats did was to reinforce Synge's own peculiar sense of mission. But it is necessary to understand, at the same time, that between 1898 and 1902 Synge spent most of each year in Paris and only six weeks at a time in Aran. He believed in maintaining a distance from his subject matter, and whereas there is no question but that the experience of Aran was artistically crucial it was in Paris that Synge encountered the two currents of modernism which steered his development: naturalism and symbolism.

12) A・E・マローン（久保田重芳訳）『アイルランドの演劇 1899-1923』富岡書房「第5章 助成金を与えられた劇場」を参照。

13) J.M.Synge, *Collected Works* II *Prose.* Colin Smythe,1982. The Aran Islands.

14) J.M.Synge, *Collected Works* III *Plays Book* I. Colin Smythe,1982.
15) 前掲. *Collected Works* II *Prose.* pp.209-212
16) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.49
17) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.51
18) 前掲. Edward A. Kopper Jr. pp.34-5
19) 前掲. *Collected Works* II *Prose.* pp.70-2
20) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.53
21) 同上. p.53
22) Jean Alexander, "Synge's Play of Choice: *The Shadow of the Glen*". (*Sunshine and the Moon's Delight J.M.Synge 1871-1909.* Colin Smythe). p.28
23) 同上. pp.26-7
24) Katherine Worth, *The Irish Drama of Europe from Yeats to Beckett.* The Athlone Press. pp.126-7
25) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.57
26) 前掲. Edward A. Kopper Jr. p.35
27) Thomas J. Morrissey, "The Good Shepherd and the Anti-Christ in Synge's *The Shadow of the Glen*". (*Irish Renaissance Annual* I. Newark.)
28) 同上. p.160
29) 同上. p.161
30) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.35
31) 前掲. Thomas J. Morrissey. p.159
32) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.47
33) 前掲. Thomas J. Morrissey. p.162
34) 前掲. *Collected Works* III *Plays Book* I. p.47
35) 前掲. Thomas J. Morrissey. p.163